Sayce, Introduction to the Science of Language. 4th eel., 1900. Vol. I. P. 90)

「通常いふ言語とは有意的の表出運動で、思想感情を発表伝達する事を目的とし、その手段として或社会に約束的に定まつた音声を使ふものをいつて居る」(神保格「言語学概論」、一九二二年、一八頁)

「人間がその思想・感情をなかまに伝えるべく、分節された音声を用いておこなう表現活動」(小林英夫「言語学通論」一九四七年、二五頁)

言語を表出の手段とみるか、それとも表出そのものとみるかといふ問題を一応別にして、右の両者を比較すると、後者の定義では、前者の様に、言語を単に思想の表出[註]とみるだけではなしに、思想並びに感情の表出と見做す点が注目される。今この二つの観方について一考してみよう。

註　尤もこの場合に謂ふところの「思想」を「思考」「思惟」とみるべきか、同時に想起された「感情」も含めたものかどうも概念規定が明確でないとも云へる。

人間言語の構造を究明するに当つて、対象を情意活動から截断して、単に知的な面にのみ求めたのは、十九世紀の近代言語学の主流を占めて来た実証主義言語学の最も著しい特徴であつた。彼等が先づ当面の対象として取扱ふものは音韻であり語彙であり語法であつた。その態度に共通するところは、表出運動の結果として横たはつゐるものが問題であつた。その分析以後の対象たる言語そのものの本質を闡明しようといふ様な最も重要な出発点に於ける正しい言語

書評

大久保忠利氏訳「ハヤカワ思考と行動における言語」

小嶋孝三郎

(一)

「簡単に且包括的にいへば言語とは人類の思想を発表する手段であると定義することが出来る」(W. D. Whitney, Life and Growth of Language. 1875, p. 1)

「言語はことばの音声(Speech-sounds)を手段に使つて思想を発表したものと定義する事が出来る」(H. Sweet, History of Language, 1900. p. 1〜2)

古典的言語学書をとりだしてみると、吾々は右のやうな、言語を思想発表の手段又は思想を発表したものとみる定義を多く見出す。

これに対して、比較的新しいものを見ると、次の様に定義されてゐる。

「言語の定義を精確に下すことはむづかしいけれども、先づ差当つて間に合ふだけの定義を下せば、『吾々の声を色々に変へ、色々に組み合せたり並べたりして、之を使つて吾々が言ひ表はさうと思ふ思想や感情の符号にするもの』であるといつて良からう」(A. H.

観の確立深化を期する態度は毫も見られない。従つて、言語を以て単に「意味をもつた音声」だとか、「思考の道具」と見做して、その本質を知的性格に限定して把捉してゐたのである。

しかし乍ら、吾々が研究の対象を、結果的な資料に基づいて知的な面のみに究明するか、それとも、表現以前並びに以後の情意活動の面—心理的な面乃至行動的な面を併せて究明するかといふことは、現代の言語学に課せられた大きな課題と云はねばならない。

人間言語が鳥獣の音声に比較して、本質的に相違する点は、後者が本能的自然的な表出であるのに対して、それは理知的人工的であること、たとへ後者にも観念らしいものが存在するとしても、人間の様に複雑高等な思想の分節などといふことはあり得ないことがあげられる。人間言語は本質的に自然音ではない。従つて知的なものであらう。たとへ情的なものが表現されるとしても、それは決して直接的ではない。例へば「嬉しい」とか「悲しい」とかいふ表現にしても、それが決して感情の直接的表現ではなくて、単に「嬉しい」「悲しい」といふ概念を音声的に表現したにすぎない。それ故この表現そのものに話者乃至聴者に感情情緒がこめられてゐるか否かといふことは、自ら別問題でなければならない。人間言語が分節音といふ知的な手段を用ゐてゐる限り、そこに直接感情の介入する余地はないとも一応考へられるのである。

旧来の言語学書——少くとも十九世紀の実証主義を遵奉する言語学者達が、「言語とは何であるか」といふ問題に触れず、従つて又言語の定義づけ等にも殆ど関心をもつてゐなかつた理由が、右の様に対象を単に知的手段として余りにも限定しすぎて取扱つたことにもよらう。

欧洲言語学に於ける近来の著しい傾向は、かうした実証主義の後退と、これに代る理想主義の抬頭であらう。所謂「構成主義から構造主義へ」「媒介観より動力観へ」は現代世界の言語学界に於ける動向を単的に明示してゐる。直観即表現即芸術といふ説で有名なイタリヤのクローチェによれば、言語即ち詩である。（「表現の科学としての美学」）この考へ方と必ずしも一致しないまでも、さうした表現学的言語観を有するものに、かのフォスラーがある。彼は言語学の真の対象が、単に物理的な方面のみに存在し得ないことを挙げて、新たに心理的方面より出発する表現的研究の重要性を論じてゐる。吾々は茲に主知主義的言語観に対立する主情主義的言語観を見出すのである。（「言語学に於ける実証論と観念論」一九〇四年）

又一方、かうした反実証主義の立場をとるものとして、かのフンボルト以来、シュタインタール、カッシラー、ヴァイスゲルバー、シュテンツェル等に至る独逸言語哲学派の「言語内在形式」の究明を見逃すことが出来ない。又、ヴントからブレンターノ、マルテイ、ビューラーの如き心理学派の抬頭によつて、更にはオグデン、リチャーヅ共著「意味の意味」（Ogden ane Richards: Meaning of meaning. 1930）等によつて、旧世紀的実証主義に於ける言語観の偏見は漸く是正されようとしてゐるのである。

クローチェの言語観に大いに共鳴してゐたかのアメリカのサピアは、その著「言語」（Language. An Introductin to the Study of Speech 1921）第一章序論に於いて、言語の定義に就いて考察し、

次の様な論述がある。

われわれは日常生活では、概念そのものよりも、むしろ具体的な事柄や特別の関係に関心を抱いてゐる。例へば、私が「今朝は飯がうまかつた」といふ様な場合に、私は、何も苦しんで肩の凝るやうな思索に耽つてゐるわけでないことは明らかだ。伝へたいのは愉しい記憶であつて、それが習慣的な表現の溝によつて記号的にあらはされてゐるに過ぎない。その文中の各要素は個別的な概念または概念的関係、もしくは両者の結合したものを規定してはゐるが、しかし文全体としては、なんら概念的な意義を持たない。中略。言語は心の用の全般にわたることの出来る道具であると見做されよう。（木坂千秋訳一四―一五頁）

右は表現そのものが必ずしも思考思惟の如き知的なものと限らず、対象を「文全体として」みる時「愉しい記憶」の伝達が目的であり、この情意活動をぬきにして、対象を「個別的な概念又は概念的関係」といふ様な知的な面のみに把握すべきでない、「心の用の全般にわたる」点、即ち知情意の全般にわたる点を考察すべきことを論じてゐる。

言語をたゞに思想発表の面即ち知的な面にのみ捕捉すべきではなくて、感情表現の面、情意活動の面に新たに究明のメスをふるふべきことを論じた最初の述作に、かのソシュール学を祖述したバイイをあげなければならぬ。

総じて生活の現象は、そこに人間の本性の情的及び意志的要素が恒存し、しばしばそれが優勢であることをもつて特徴とする。従つて理知は頗る重要なりとは言ひ条、そこでは手段の役割しか務めない。その結果、かやうな特質は自然的言語活動のうちに反映して、それが純然たる知的構成物であることを妨げてをり、又いつまでも妨げるであらう。中略。かくして余は言語活動をば感情の表現であり行動の要具であるとして研究することの、言語学にとつて肝要なることを強調せんと試みたのである。」(Bally, Le langage et la vie. Geneve, Atar, 1913 小林英夫訳「言語活動と生活」二一頁)

右は、言語が生活の表現である限り、それが純然たる知的構成物たり得ず、寧ろ人間の本性たる情意の要素が優勢であるから、言語現象を感情の表現乃至行動の要具として観察すべきことの重要性を論じてゐるのである。

既述の如く、又右のバイイの説明によつて明示されてゐる様に、現代欧洲言語学に於ける研究対象の視野は、特に「意味研究」に於いて、主知主義より主情主義への転回から、更にはこれらの綜合を期してゐる様である。わが学界に於いても、匆にかうした方面に学の重要性を認識して、既に研究に着手し、又その業績の一部が発表されてはゐるが、未だ学界の主潮流はさうしたこととは寧ろ無縁とも思はれる活動も続いてゐるのである。

（二）

かうした際、大久保忠利氏訳「ハヤカワ思考と行動における言語」（岩波現代叢書）を得たことは、わが学界にも必ずや大きなプラスとなるであらう。

本書の原著は、S. I. Hayakawa, "Language in Thought and

Action", 1949, Harcourt, Brace and Co., New York. で、原著者は、カナダに国籍を有し、アメリカでも評論・講義・機関誌編集等に大いに活躍し、特に「一般意味論」運動の指導的人物として、非常に注目されてゐる人である。「一般意味論」といふのは、アルフレッド・コーズィブスキー Alfred Korzybski (1879～1950) の創始によるものであり、

言語と人間との関係を研究対象とする科学。
言語その他の記号に対する人間の反応の研究。
記号のシゲキを以て、またそれを受けての人間の行動の研究。
人間の相互作用を言葉のコミュニケーションの機構を通して研究する。

この書は言語・思考・行動の間の関係を専ら研究する。言語と、人々の言語的習慣が、人が考える時（考えの十中九までは自分に話しているのである）、話す時、聞く時、読む時、書く時に、どう現われるかを調べようと思う。この本の基礎にある仮定は言語の使用を通じての広い種内的協同が人間生存の基礎的機構であること。それと平行の仮定は、しばしばそうであるように言語の使用が不一致と衝突を創り激化させた場合には、話し手か聞き手か、その両方かに欠陥がある、ということである。人類の「生存適格性」とは、人々が共に生存できる機会を増すような方法で話し書き聞き読む能力を持つ、という意味である。（三〇頁）

とある。

右によつても解るやうに、著者は先づ、

人間は話す動物である。――この事実を考えに入れない人間生存の理論は、海狸（ビーバー）が歯と平たい尾の興味ある使用を考えに入れないで海狸生存の理論を考えるのと同じに科学的でない。（二一頁）

と指摘し、人間生存にとつてそれ程大切な言語の機能が、恰も「潤滑油」でありながら、その中に「目に見えない金剛砂」を混じへてゐることに人々は気づいてゐない、それ故、吾々はそれをあく迄探し出さねばならない。

たとえ少しでもその探求に成功すれば、現在はまだ不完全にしか実現されていない人類の協同の可能性を押し進めるには、どの方向に前進すればよいかのあらましを探り当てることができるかもしれない。（一五頁）

といふ。茲には、「医学的仮定が健康の方が病気より好ましいというのと同じく、協同の方が衝突より好ましい」といふ「倫理的仮定」に立脚して、人間社会協同の為の正しい言語を求める「意味論研究」の立場が窺はれる。

ところで、本書の冒頭には、次のやうな「意味論的寓話」がある。それは、精神的にも地理的にも、ひどくかけ離れた二つの社会（A町とB村と）に共通の問題、即ち不況による解雇が行なはれた。さて、A町の役員達は、資産のある実業家で、教育もあり、親切にみえる人達だつた。彼等はこれを「救済」の名において、不幸な解雇者達に呼びかけた。しかしそれは完全に失敗に終つたのである。ところがB村の行き方は全く別で、村の役員の一人が「保険」の原理を説いて、その適用を事務的に提案した。その結果、B村の失業者達は、月五〇ドルのおかげで、自殺もせず、失敗者として心も責められず、罪も犯さず、頭も変にならず、階級的憎悪に発展もしなか

つた。さて教授の語つた右の様な話に対して、友人間に討論が始められ、広告家は「『救済』を『保険』と呼ぶのは名案だ」といひ、他の一人、社会運動家は「それは『救済』などではなくて、失業者の当然の権利だ」といふ。二人は「何と呼ばうと救済だ」「だまれ保険だ」といふ訳で、腹を立て、喧嘩をして、各々の細君までも口をきかなくなつた。又広告家は自分の息子をおどかして、若し息子が社会運動家の娘との婚約を破棄しないと言ふなら勘当するとまで言ひ出した。以上がその概略であるが、茲には、コトバのもつ思想性なり人生観世界観の相違、従つてそれが各人の思考を支へ、感情を左右し、更には行動に及ぼすといふ様な、謂はば言語生活の文化的背景を考察することの重要義をよく暗示してゐると思ふ。言語と思考との分つべからざる結合性は、「言語の差異は音響や記号についての差異でなく、世界の見かたそのものの差異である」といふフンボルトの言葉や、ヴァイスゲルバーの「言語社会学」にみられる、言語は社会の創造であり、社会制度であるとする見解にも通ずるものがあらう。

十九世紀に至つて所謂「音韻法則」が発見され、実証的な言語研究が「科学」としての基盤を確立した。ソシュールが言語を本質的に「知的なもの」として把握し、バイイがそこから新たに「感情的言語」を取り上げたのであるが、茲には更に進んで「それを受けての行動の研究」を目ざす所以がある。

言語の研究に対して、この様な新たなる視点に立つことは、欧米諸国に於ける注目すべき最近の動きとして、それが今後どの様な方向に新しい理論なり体系なりがうち樹てられるかは、まことに期待の大きいものがあらう。

わが国に於いても、戦後「思想の科学研究会」や「民主主義科学者協会」の人達によつて、かなり新しい研究の領域が示されつゝある。この著の訳者大久保氏は、戦後いち早く「百万人の言語学」を刊行し、その後も数多くの労作を世に問ひ、最近には「コトバの魔術と思考」「コトバの心理と技術」「コトバの生理と文法論」の三著によつて、その言語研究に於ける心理学的社会学的立場を明らかにすると共に、わが学界の言語研究に対しては、あく迄批判的立場を堅持してゐられる。

著者はその序（日本語版のために）に、

今日の日本の思考と教育に、意味論 Semantics の必要性があるであろうか　私は知りませんけれど、たしかに、日本にも、英語国でと同様の意味論の大きな必要性がある、と感じられるのです。

意味のないコトバに影響を受けやすいこと、雄弁に熱を込めて言われた事を信じ易い傾向、事実で考えるよりも標語のようなもので考え易いこと、などは、英語国民や西洋人たちだけに特有の欠点ではなくて、人類の大部分の弱点であります。コトバによる自己陶酔の可能性は、言語のあるところ、常に存在

すると指摘してゐる。著者のかうした警告が、吾々日本人にとつて、今迄から、どれ程痛感されてゐたことであらう。その具体的な材料は、吾々の日常身辺にあり余る程ではなからうか。

著者は更に、

日本の哲学的または科学的思考において、意味論的問題が、ま

だ考えられていなかつたか？――は私から日本の読者に自分で答えて頂きたい。

と云つて、意味論運動推進についての批判と協力とを希望してゐるのである。

（三）

本書は二部に分れ、第一部「言語の機能」に於いては人間言語の解明を単に用具的通達的地図的科学的報告の言語としての機能の面のみに置かず、これを個人又は集団の感情を左右（結合又は反撥）し、行動に影響を与へる前記号的感化的コミュニケーションの面に注目して、「日常生活に入り込んでいる前記号的要素を理解すること」の重要性を説き、

言語を理解し、また使用する能力を増すためには、従つて、語の通達的内包に対する識別力を磨くだけでなく、言語の感化的要素を見抜く力を磨かなければならぬ。（九五頁）

といつてゐる。感情のみならず、吾々の行動に最も大きな影響を与へるものとして、人間は「未来の出来事」を「調整する」「言語の指令的用法」を心得てゐる。従つてそれが、「人類の未来の活動を調整し、指導し、影響を与える」（九九頁）無智、過失、不誠実などの「指令的言語」が引起す失望（指令と幻滅）は、やがて「人間のあいだの相互信頼を破壊」（一〇二頁）し、社会の秩序を攪乱する。故に人々が「できるだけ確実な発言を実行することが道徳的な義務である。」（一〇二頁）と論じてゐる。

なほ著者は「科学は報告の中で最も正確な報告」「文学は感情の最も正確な表現」「である」としてゐる（一二七頁）が、厳密には「である」ではなくて、「を期している」又は「目ざしている」と説くか、さもなければ、「真の」科学又は文学と断る必要があらう。

第二部「言語と思考」は「牝牛ベッシー」から説かれ、「牝牛1は牝牛2ではない」といふ著者独創の法則を基礎とし、「抽象のハシゴ」を図示して過程のレベル（段階）を明らかにしてゐる。茲では第一部に説かれた「外在的意味」（外延・感覚的・具体的）と「内在的意味」（内包・非感覚的・抽象的）の関係を明確にして、「抽象の過程」に於ける種々の「評価錯誤」をとりあげて分析してゐる。例へば、「頭の中の抽象と外側との混同」「レベルの混同」「コトバのグルグル廻り」「低いレベルの抽象こだわり型」から、更には「抽象への不信用」「妄想の世界」「思い込み型」「二値的考え方」（感情的）「言語過剰」等々。さうした「内在的考え方」の原因が「事実」（ている）と「理想」（あるべき）との食ひ違ひによるものであり、無責任な「教育」や「雑誌の小説」「広告」等のコミュニケーションに大きな注意を払はねばならぬことを説き、

内在的考え方は、今や消費者の生活の、指導原理にまで高められている（二三九頁）といふ。

さて本書の圧巻とも称すべき章は第十六章「人間とネズミ」であらう。茲では「制度的惰性」と、「偏狭な近視眼的利己心」によつて、あるひは「変化への恐怖」「行き止まり」等によつて、人間（世界）の文化の問題が甚だしく遅れてゐることをとりあげ、吾々は、難問にぶつかつて適合（適応）を忘れたネズミのやうになつてはならない、「外在的接近」（外在的考え方）「科学的態度」によつて、

吾々自身を「狂気に追い込」まないよう努めねばならぬと論じてゐる。（二四一―二五九頁）

私が茲まで書いて来た時既に与へられた紙数も超過し、いさゝかくたびれたので、一寸休憩しようと思つて何げなくラジオのダイアルを廻すと、「バンザイ〳〵」といふ嵐のやうな声が聞えて来た。「何だらう」と思つたら何のことはない。今日は丁度「天皇誕生日」である。この「バンザイ」の「感化的内包」は、この国の老若婦女子の夢、即ち平和・秩序・繁栄等々の「常識的象徴」だと直感した。彼等は「いくつになつても、親のシンボル parent-symbol を必要とする――『あらゆる答』をそれから求められる慰めになる権威を。」（二六六頁）さうだ。この国の人々に「常識の勝利」を齎らさない為にも、この書は大きな意義をもつだらう。

（一九五五年・四・二九）

受贈誌

日本文学	一・二・三・四・五・六月号	創刊号	日本文学協会
近世文芸	終刊号	創刊号	日本近世文学会
ぱんせ		終刊号	三色菫の会
国語	第三巻 第三号		東京教育大学国語国文学会
国語学	第十八・十九・二十輯		国語学会
近代文学攷	第三輯		近代文学研究会
語文	第十四・十五号		日本大学国文学会
万葉	第三十六号		万葉学会
明治学院論叢	第十一輯		明治学院大学文経学会
国文学研究	第二・三号		早稲田大学国文学会
成城文芸	第十三号		成城大学文芸学部
国文学		七	関西大学国文学会
女子大国文		創刊号	京都女子大学国文学会
文学研究		第六巻第二号	法政大学日本文学研究会
日本文芸研究		国文篇第九号	関西学院大学日本文学会
女子大文学		十五号	大阪女子大学文学会
文学思潮		創刊号	「近代文学」大阪研究会
山辺道		第二集	天理大学国文学研究室
人文研究		第四・五号	神奈川大学人文学会
西京大学学術研究報告人文		第三輯	西京大学
横浜国立大学人文紀要		第三号	横浜国立大学
埼玉大学紀要		第四号	埼玉大学
滋賀大学学芸学部紀要		第五・六集	滋賀大学
東京学芸大学研究報告		第五号	東京学芸大学
島根大学論集			島根大学